



「子育て質問票」の因子構造とその特徴の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小池, 徳子, 三木, 直子, 川部, 哲也, 木村, 長永, 高原, 主悦, 長谷, 祥香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005317

「子育て質問票」の因子構造とその特徴の研究

小池 徳子, 三木 直子, 川部 哲也,
木村 長永, 高原 主悦, 長谷 祥香

1. 問題と目的

子育て支援に役立つ質問票（以下、子育て質問票）は、日本臨床心理士資格認定協会研究助成事業2010年度重点研究テーマ『地域にかかわる多様な臨床心理士活動（学校支援、子育て支援等を含む）』で採択された研究事業『子育て支援に役立つスクリーニング調査票の開発とその有効性の検証—大阪府次世代育成支援行動計画「こども・未来プラン後期計画」との連携を通して—』（研究期間3年）の一環として、大阪府立大学心理臨床センターにおいて開発され、臨床的使用について実践的に研究が積み重ねられてきたものである。川原ら（2013）によると、本学心理臨床センターでの心理相談を積む中で、子育てに関する相談が増え、それに伴い小児心身症や発達障がい、虐待のリスクを来談者と共にセラピストが把握するための簡潔な質問票を開発し、来談者支援に寄与したいという必要性が生じたとある。子育て質問票は、①迅速かつ簡便に親子の状況を把握すること、②養育者による回答を通して子どもの状況を把握する視点を養育者自身に生じさせ、且つ来談への動機づけを高めることを目的としている。質問項目は心身症、発達障がい、家族機能・虐待問題に関する3つの研究班に分かれて作成され、最終的に31項目で構成されている。心身症に関する研究班では「身体」「心身症」をキーワードに文献を集め、議論を行ない、項目を作成している（高橋ら、2013）。作成された項目は心身症であるかどうかではなく、母親や子どもの身体性について問うものとなっており、「親子のこころとからだ」領域として10項目が作成された。発達障がいの項目は、発達障がいに関する文献と、これまでの発達検査や心理検査についての概観、発達障がいを持つ来談者とのセラピー体験から、10項目を作成した（川部ら、2013）。家族機能及び虐待リスクを捉える項目は、既に虐待リスクをアセスメントするためのスクリーニング調査票が数多くあるので、そこから特に重要と思われる項目を選定・整理していた。家族機能についても質問紙がすでに開発されているので、家族の機能不全を測定するのに有効な項目を選定し、11項目を作成した（橋本ら、2013）。以上より、子育て質問票は「発達障がい」「親

子のこころとからだ」「家族機能」という3つの観点からなる31項目で構成されている（川原ら、2013）。

その後、現在に至るまで本学心理臨床センターに子どもの問題を主訴として来談した養育者（以下、臨床群）に子育て質問票を実施し、回答を集積している。子育て質問票の解釈には一般的な回答傾向を踏まえる必要がある為、子どものことで特に相談機関を利用していない養育者（以下、対照群）の回答も収集し、それを元に川原ら（2014a）は子育て質問票の回答の得点分布の分析を行った。また総田ら（2014）は子育て質問票を見立てに生かした事例を検証し、質問票のプロフィールの類型化と継続事例における質問票の変化と経過の検討を行っている。その中で、子育て質問票は通常の質問票のように特定の特性を「拾い上げる」ないし「測定する」機能は比較的弱く、SCTのように一種の刺激語として養育者から多彩な反応を引き出す投影法的性格が強いと述べられている。

以上より、これまでの研究から子育て質問票の特性や有用性がある程度明らかになってきたが、子育て質問票がどのような構造になっているのかや、その回答が示唆する回答者の特徴については明らかになっていなかった。本研究は、子育て質問票の31項目がどのような因子構造を成しているかを抽出し、各因子（下位尺度）の回答がどのような特徴を示すものであるかを明らかにすることを目的としている。

2. 方法

(1) 調査時期及び調査対象者

調査時期は2011年11月～2015年1月である。この期間に本学心理臨床センターに子どもの問題を主訴として来談した養育者75名を臨床群とした。内訳は、男性5名、女性61名、両親ともに来談し、いずれが回答したのか不明であるものが9事例で、平均年齢41.72歳、標準偏差（以下、SD）= 6.07である。子どもは男児45名、女児30名、平均年齢10.32歳、SD = 3.75であった。高校生以下の子どもを持ち、特に子どものことで相談機関を訪れていない養育者195名を対照群とした。内訳は男性2名、女性174名、不明が19名で、平均年齢41.64歳、SD = 6.16である。子どもは男児92

名、女兒85名、平均年齢10.39歳、SD = 9.40であった。

(2) 手続き

臨床群は、初回面接の前に受付にて質問票を手渡し、各自教示を読んだ上で記入してもらった。対照群は、高校生までの子どもを持つ養育者に手渡し、各自教示を読んだ上で記入してもらった。なお、臨床群においては記名、対照群においては無記名による回答である。対照群は本学心理臨床センターの来談者ではないので、「どうしてここに来ないといけないかわからない」「今ある症状をいっくも早く取り除いてほしい」の2項目を削除した子育て質問票を用いた。教示は臨床群、対照群ともに、調査への協力は自由であること、子育てについての調査であり、得られた結果は臨床心理士が子育て支援に貢献するための資料として用いること、回答は個人が特定されないように処理をされること、答えにくい質問や答えたくない質問については回答しなくてもよいこと、記入例を示し各質問の該当する所に○をつけることを記載した文書子育て質問票に添付して行った。

(3) 分析方法

臨床群、対照群いずれか一方ではサンプルに偏りがあり、子育てをしている養育者の母集団を反映させる為、臨床群、対照群を合わせた回答データに探索的因子分析（主因子法プロマックス回転）を行なった。因子分析の結果抽出された因子を下位尺度とし、下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出した。平均値から±2SD以上離れた外れ値を有する事例を臨床群から抽出した。抽出された事例の初回面接から読み取れる事例の特徴と尺度得点との関係について検討を行なった。

3. 結果

(1) 子育て質問票の因子構造

臨床群、対照群を合わせた計270名のうち、1つの質問項目に対して2か所に回答していたり、無回答がみられたりするなど欠損値があるデータを除いた計217名のデータを用いた。そのうち臨床群は44名で内訳は、男性3名、女性36名、不明が5事例で、平均年齢41.90歳、SD = 6.38であった。子どもは、男児26名、女児18名、平均年齢10.30歳、SD = 3.50であった。対照群は173名で内訳は、男性1名、女性156名、不明が16事例で、平均年齢41.79歳、SD = 6.18であった。子どもは、男児81名、女児77名、平均年齢10.61歳、SD = 9.81であった。臨床群、対照群に共通する29項目について探索的因子分析（主因子法プロマックス回

転）を行った。その結果、因子数が5と6の間で固有値が大きく減少したので、因子数を5に設定し、さらにいずれの因子にも.30未満の因子負荷量を示した「運動が得意だ」「手先が不器用である」「妊娠や出産の時に嬉しくなかった」の3項目を除外し、再度因子数を5に設定した上で、主因子法・プロマックス回転を用いた。表1は得られた因子パターンを示したものであり、各質問項目には、川部ら（2013）による発達障がい傾向や可能性を探る目的で開発された項目にはDevelopmentのD、橋本ら（2013）の家族機能及び虐待リスクを捉える目的で開発された項目にはFamilyのF、高橋ら（2013）の母親や子どもの身体性について問う項目にはPsychosomatic diseaseのPを付け、元々どの研究班が作成したものかをわかるようにした。5因子での累積寄与率は0.49であった。第1因子には8項目含まれ、そのうち7項目は発達障がい傾向や可能性を探る目的の項目であった。項目は全体的に子どものことを問う項目になっており、問題や困りごとを子どもに位置づけている項目であると考えられた為、「子どもの困難」と命名した。第2因子は5項目が含まれ、すべて家族機能および虐待リスクを捉える目的の項目で構成されていた。主に、親自身のことを問う項目になっており、特に育児に関する項目で構成されていると考えられた為、「育児困難」と命名した。第3因子は6項目を含み、家族機能及び虐待リスクを捉える目的の項目が4項目、発達障がい傾向や可能性を探る目的の項目と母親や子どもの身体性について問う項目がそれぞれ1項目ずつ含まれていた。第2因子と同様、親自身のことを問う項目になっているが、特に親の子どもへのまなざしを問う項目になっていると考えられた為、「親子関係困難」と命名した。第4因子は4項目が含まれ、そのうち3項目が母親や子どもの身体性について問う項目で、1項目が家族機能および虐待リスクを捉える目的の項目であった。これらは、親が子どものからだと関わる関係性についての項目であり、関係性の生々しさへの抵抗についての項目であると考えられた為、「生々しさへの抵抗」と命名した。第5因子は3項目が含まれ、いずれも母親や子どもの身体性について問う項目であった。第4因子と同様に関係性を問う項目となっているが、特に相互的な心身交流について問う項目となっていると考えられた為、「相互性」と命名した。①「子どもの困難」、②「育児困難」、③「親子関係困難」、④「生々しさへの抵抗」、⑤「相互性」の α 係数は、順に0.77、0.74、0.68、0.56、0.33であった。

表1 子育て質問票の項目の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転後)

	F1	F2	F3	F4	F5	共通性	平均	標準偏差
子どもの困難 ($\alpha = 0.77$)								
C ふとしたことで取り乱し、落ちつくのに時間がかかる。	0.74	0.02	0.07	-0.1	0.24	0.68	2.25	1.24
C 友達と仲よくなりたい気持ちがあるが、友達関係をうまくつくれな	0.6	0.07	0.05	-0.08	0.18	0.47	2.32	1.16
P 子どもは私のいっつけをよく守る。	-0.6	-0.05	0.14	0.06	0.18	0.33	3.27	0.94
C 私とのコミュニケーションがスムーズである。	-0.57	-0.16	-0.03	-0.04	0.11	0.49	3.92	1.01
C 人からのちょっとした働きかけを嫌がる。	0.51	0.11	-0.11	0.09	0.14	0.37	2.25	1.09
C ルールのある遊びを楽しめる。	-0.5	0.1	-0.01	0.01	0.14	0.2	3.98	0.94
C 何が面白いのかよく分からない遊びを延々とする。	0.45	-0.24	-0.15	0.36	0.04	0.32	2.48	1.12
C 言葉の使い方の特徴がある。	0.35	-0.04	-0.27	0.19	0.07	0.19	3	0.89
育児困難 ($\alpha = 0.74$)								
F 育児の相談をできる人がいる。	-0.05	-0.83	0.31	-0.05	0.1	0.63	4.37	0.84
F 誰にも育児を手伝ってもらえない。	-0.09	0.79	-0.09	-0.08	0.04	0.48	1.76	1.03
F 育児に自信が持てない。	0.12	0.53	0.29	-0.12	0.03	0.59	2.81	1.03
F なぜか疲れやすい。	-0.05	0.43	0.23	0.17	0.19	0.41	3.27	1.17
F 子どもが好きと思えない。	0.03	0.43	0.05	0.07	0	0.24	1.52	0.76
親子関係困難 ($\alpha = 0.68$)								
F 子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である	0.03	-0.24	0.45	0.08	-0.03	0.18	3.43	0.92
F 子どもが期待通りにいかななくて困る。	0.34	0.14	0.42	-0.05	-0.17	0.52	2.68	1.07
F 子どもの欠点が目につく。	0.2	0.25	0.41	-0.01	-0.18	0.49	2.68	1.07
F 子どもが何か悪いことをすると私のせいだと思ってしまう	-0.01	0.25	0.38	0.08	0.22	0.38	2.8	1.07
F 子どもに対してイライラする。	0.33	0.2	0.36	0.1	-0.1	0.56	3.2	1.08
C 感覚が敏感なときがある。	0.18	-0.02	-0.34	0.06	0.1	0.11	3.65	0.88
生々しさへの抵抗 ($\alpha = 0.56$)								
P オムツを変えるのはゆううつだった	-0.04	0.05	-0.04	0.47	-0.08	0.22	1.42	0.72
P 子どもに公園の砂場で砂遊びをさせることに抵抗がある	-0.14	0	0.31	0.45	-0.1	0.27	1.77	1.09
P わが子が、なぜ甘えてくるのかわからない時がある。	0.07	0.23	0.14	0.41	0.04	0.4	1.88	0.91
F 子どもに関心を向ける余裕がない。	0.03	0.34	0.02	0.36	-0.1	0.34	1.97	0.85
相互性 ($\alpha = 0.33$)								
P 子どもは気持ちが不安定になるとからだの調子が悪くなる	0	0.42	-0.19	0.01	0.47	0.35	2.73	1.18
P 痛がっていることも身体をさすると、痛みがおさまることがある	0.05	-0.03	-0.14	-0.08	0.42	0.19	3.86	0.82
P 子どもと目が合うとうれしい	-0.27	-0.21	0.11	-0.05	0.41	0.31	4.26	0.81
固有値	6.45	1.83	1.57	1.52	1.46			
因子間相関								
	F1	F2	F3	F4	F5			
F1	-							
F2	0.56	-						
F3	0.42	0.44	-					
F4	0.33	0.26	0.13	-				
F5	0.14	0	0.11	0.13	-			

注1) 因子分析の因子負荷量が .30 以上のものを網掛けで示した

(2) 下位尺度得点

下位尺度それぞれの項目の得点の加算平均を算出し、得点化を行った。図1はそれぞれの下位尺度得点の平均値 (M) と誤差棒は標準偏差 (SD) を示したものである。①子どもの困難の下位尺度得点はM = 2.39, SD = 0.65, ②育児困難はM = 2.20, SD = 0.69, ③親子関係困難はM = 2.94, SD = 0.62, ④生々しさへの抵抗はM = 1.76, SD = 0.59, ⑤相互性はM = 3.62, SD = 0.62であった。

平均値から2SD以上離れた外れ値を有する事例を臨床群から29事例抽出した。事例の抽出においては、回答に欠損値のあった事例についても、得点が算出できる下位尺度においては算出し、検討する事例に含めた。表2は各下位尺度得点の±2SDの値と、1つの下位尺度に於いて±2SD以上高い、あるいは低い尺度得点を有した事例を示したものである。表3は2つ以上の下位尺度に亘って±2SD以上高い、あるいは低い尺度得点を有した事例である。

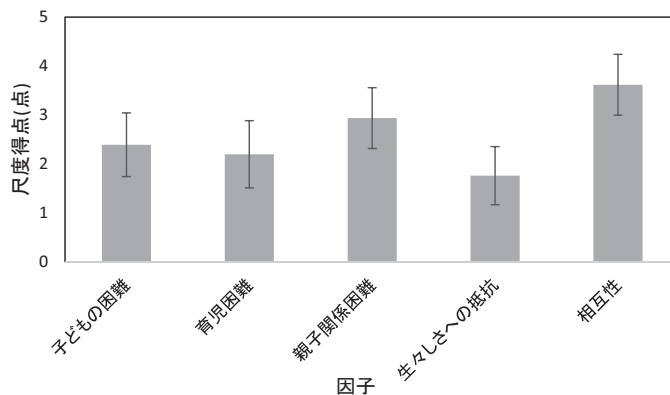


図1 各因子の尺度得点

4. 考察

(1) 子育て質問票の構造について

因子分析の結果、表1に示した通り、子育て質問票の項目を作成するにあたり、軸とした「発達障がい」「親子のこころとからだ」「家族機能」という3つの観点の背景に、①「子どもの困難」、②「育児困難」、③「親子関係困難」、④「生々しさへの抵抗」、⑤「相互性」という5つの因子を想定出来た。①「育児困難」の項目は、殆どが川部ら（2013）によって作成された発達障がいの傾向や可能性を探る目的で開発された項目であり、②「育児困難」と③「親子関係困難」は殆どが橋本ら（2013）の家族機能及び虐待リスクを捉える目的で開発された項目であり、④「生々しさへの抵抗」と⑤「相互性」は殆どが高橋ら（2013）の母親や子どもの身体性について問う目的で開発された項目であった。このように、それぞれの研究班で作成された項目は統計的にもある程度のまとまりがあると考えられる。橋本ら（2013）が想定した「家族機能」は、子育て質問票の回答において、②育児困難と③親子関係困難という2つの因子の影響を受けていることが示唆され、育児と親子関係という2つの視点から家族機能と虐待リスク捉えようとしていると考えられる。また、高橋ら（2013）の想定した「親子の心とからだ」の領域は、子育て質問票の回答において④「生々しさへの抵抗」と⑤「相互性」という2つの因子の影響を受けていることが示唆され、関係性の生々しさへの抵抗と親子の相互的な心身交流という2つの視点から捉えていると考えられる。

(2) ①「子どもの困難」

因子「子どもの困難」で2SDを超えた得点を示したのは7事例である。この7事例は、子どもが発達障がいの疑いを示唆されていたり、心理検査を実施されていたり、何らかの手術を受けていたり、不登校であったりと養育者の目を引くような特徴を持っていた。手術や検査といったことだけでなく、発達面において何らかの特徴を持っていた。うち、発達障がいの診断がついているのは3事例であり、残り4事例は診断はついていない。①「子どもの困難」に含まれる項目は表1に示した通り、殆どが川部ら（2013）によって作成された発達障がいの傾向や可能性を探る目的で開発された項目である。その為、この下位尺度で平均より+2SD高い得点となる事例は、子どもに発達障がいなど何らかの診断がついている事例が多いのではないかと予測された。子育て質問票を実施した事例全体では、紹介状などがあるなどして診断がついている事例は12事例あるので、そのうちの3事例がここに属する一方、残り9事例はこの因子でさほど高い値を示していないことになる。

このことから、①「子どもの困難」の下位尺度は、単に子ども側の特徴的行動を表しているのではなく、「親の子に対する眼差し」と「子どもの特徴」の相互作用が影響していると考えられる。子どもの言語能力が比較的高いなど他の子どもと同じように出来るところがある事例であっても、養育者自身が子どもに対して、大多数の子どもと同じような発達をしている子どもなのか、遅れや何らかの障がいのある子どもなのかというところで揺れ動き、結論が出ていない様子が窺

表2 下位尺度ごとの平均得点と標準偏差及び極端に高いあるいは低い得点の事例

下位尺度	平均 (SD)	± 2SD の値 (+2SD/-2SD)	1つの下位尺度に於いて高得点あるいは低得点の事例
①子どもの困難	2.39 (0.65)	3.69/1.09	事例4, 事例11, 事例12, 事例19, 事例20, 事例26, 事例29
②育児困難	2.20 (0.69)	3.57/0.82	事例2, 事例9, 事例14, 事例21, 事例25
③親子関係困難	2.94 (0.62)	4.18/1.69	事例5, 事例7
④生々しさへの抵抗	1.76 (0.59)	2.95/0.57	事例8, 事例24, 事例28
⑤相互性	3.62 (0.62)	4.86/2.37	事例1, 事例3, 事例27

表3 2つ以上の下位尺度に亘って外れ値となる尺度得点を有した事例

事例	2SD 以上高い, あるいは低い得点の下位尺度
事例6	②「育児困難」, ④「生々しさへの抵抗」
事例10	①「子どもの困難」②「育児困難」③「親子関係困難」
事例13	①「子どもの困難」②「育児困難」
事例15	①「子どもの困難」②「育児困難」
事例16	②「育児困難」⑤「相互性」のみ-2SD
事例17	②「育児困難」④「生々しさへの抵抗」⑤「相互性」のみ-2SD
事例18	②「育児困難」③「親子関係困難」
事例22	②「育児困難」③「親子関係困難」④「生々しさへの抵抗」
事例23	①「子どもの困難」②「育児困難」③親子関係困難

えた。その為、養育者は発達の遅れがあるのかどうかという目で子どもを見やすくなり、子どもの発達特性に敏感になって、子どもについての質問項目を多く含む①「子どもの困難」で極端な得点になると考えられる。

子どもに診断についている事例に対して、①「子どもの困難」の得点が極端になる事例が少なかったのは、子どもの発達の遅れなどといった特徴をある程度受け入れていると、得点は極端にならないが、迷っていると極端な値になるのではないかと考えられる。

また、事例20, 事例29を除くと、子どもが小学校高学年男子であったことから、①「子どもの困難」の項目はそれ以前であれば、養育者も年齢的に気にならないが、高学年になると目につきやすくなる可能性が考えられる。

(3) ②「育児困難」

②「育児困難」の下位尺度に於いて極端に高得点の事例は5事例あり、「なぜか疲れやすい」の回答がいずれも4か5であった。他の因子で極端な得点を取る場合もこの指標が高いことはあるが、それらとは疲れ方が異なると考えられる。いずれの事例も、どうしたらいいかかわからないことや、親としての自分が変わ

ればいいのではないかとということがインタビュー時に語られている。今の状態をどうにかしたい思いがあり、それはどうにかして「あるべき子どもの姿」に出来るはずだがそれが出来ていないという所から生じる疲れがあるのではないかと考えられる。

これらの事例は気軽に相談できる人がおらず、父親が父親としての役割を担っていない様子が窺える。周囲に頼ってはみるものの上手くいかず、一度頼って失敗したがゆえに周囲に不信感や不満を抱えている様子が窺える。例えば、父親が家に不在のことが多く、母親(養育者)が相談をしても一緒に考えてもらえなかったり、学校側への対応の不満があったり、習い事や病院など多くの機関に頼るが手ごたえを得られていない様子が窺えた。ゆえに、「あるべき子どもの姿」といったものがあり、現在その状態になっていないが、その「あるべき」状態には本来出来るはずであると養育者は考えていると推測される。それにもかかわらず、現在「あるべき」状態にすることが出来ていない、出来るはずなのに出来ないで、養育者の手には負えなくなり、養育者も、また関わる周囲も疲れ切ってしまう状態にある事例が②「育児困難」の下位尺度の得点が高くなるのではないかと考えられる。即ち、家族が子どもを抱える器として機能していないだけでな

く、取り巻く環境もまたその家族を抱えることが出来ないでいると考えられる。養育者が子どもを受け止められないだけでなく、養育者も誰かに援助してもらわないなど、抱えられておらず、「抱える」「抱えられる」ということがうまく機能していない状態であると考えられる。

また事例14と事例25の初回面接を照合すると、子どもが甘えてくることに良い感情を養育者が抱いておらず、子どもの甘えを引き受けきれない様子が窺えた。

(4) ④「生々しさへの抵抗」

この因子で2SD以上の高値を示したのは事例5と事例7の2事例であった。初回面接の情報からは、両事例とも父親は育児に一見協力しているように見え、子育てに於いて何らかの役割を担っている印象を抱かせる。例えば、父親は子どもの良い面を見て、子どものことをポジティブに捉え、子どもとの情緒的な関わりを担っていたり(事例5)、子どもを叱る役割を担っている(事例7)などである。一方で、そのような父親の働きは、その家族が抱える問題に対してあまり有効ではない様子が窺える。ある一定の役割を果たしているのに、それ以上のことに関しては担わない、母親に一任するといった姿勢である。

外部に相談をしている事例は見られたが、②「育児困難」の得点が極端だった事例に比べて、そもそも外部に対して期待を抱いていない様子が窺える。これらの事例は親子関係が母親と子どもの二者で閉鎖的になっていると考えられ、父親が子育てに於いてある一定の役割を果たす一方、それ以外を意識的、あるいは無意識的に母親に一任し、母親と子どもだけの閉鎖的な関わりになるように囲い込んでいる状態になっているのではないかと考えられる。

以上より、養育者はそれぞれ役割を担っているが、それらが1つにまとまっていないで個々の動きになっているように考えられる。お互いに連携せず、それぞれが思うようにやっている為に、家族としての機能不全に繋がっているのではないかと考えられる。図2はこうした

家族としての機能不全を図式化したものである。

②「育児困難」と③「親子関係困難」の項目の殆どは、橋本ら(2013)の家族機能及び虐待リスクを捉える目的で開発された項目で構成されているが、②「育児困難」と③「親子関係困難」は、それぞれ家族機能の異なる側面について測定していると考えられる。②「育児困難」は家族とその家族を取り巻く養育環境も含めた器としての機能を、③は家族が1つの有機体として成り立つための連携の機能について示唆を得られる項目なのではないかと考えられる。

(5) ④「生々しさへの抵抗」

この因子では3事例が2SD以上の高値を示した。事例24は子どもの欠点が目についたり、期待通りに行かなくて困ることはないが、子どもに対してイライラするなどネガティブな感情を抱いており、子育ての「生々しさへの抵抗」があると考えられる。事例24は自分の母親の方が子どものことが分かると述べたり、事例8は子どもの思いを受け止める相手は自分でなくてもいいと考えており、事例28は、子どものことで自らが困ったという感覚を持って子どものことを相談しているというよりも、これまでに訪れたことのある機関で言われたことを受けて障がいだからと捉えて語っている様子が窺えた。これらの事例は共通して子どものことで自らが困ったり、考えたり、悩んだりという感覚に乏しいように思われる。子育てに於いて、養育者自身が子どもと関わる中で感じる感覚はあまり用いず、周囲から聞いたり、調べたことに基づいて子育てをしようとしている姿が浮かび上がった。子どもの成長や現在の状態を感じ取ってそれを子育てに用いたり、養育者としての感覚や実感をもって子育てに臨んでいるというよりも、「子育て」という概念のもと、子育てをしているのではないかと考えられる。

(6) ⑤「相互性」

⑤「相互性」の3項目に於いてすべて「5」をつけた3つの事例が該当しており、子どもと養育者が密着、一体になっていると考えられる点が共通であった。該

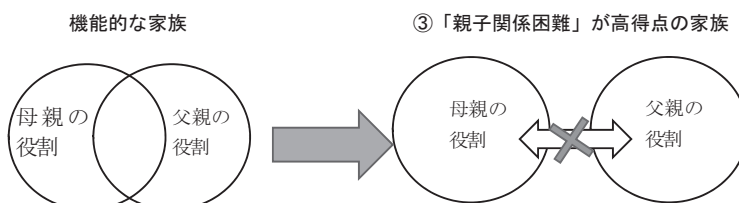


図2 家族の機能とその不全

当事例はいずれも主訴が不登校や学校への登校しぶりである。教室まで養育者が送る（事例1）、養育者はいつも子どもの手を繋ぎそばに居させたり（事例3）、一緒に居る時間を増やしている（事例27）など物理的に一緒にいる様子が語られている。いずれも母子密着が感じられるが、悪い部分を養育者は自身で引き受けることはせず、子どもに投げかけている様子が窺える。即ち養育者が子どもに自分自身を重ねていること、母子一体というよりも養育者が子どもを巻き込んでいるのではないかということが考えられた。養育者として機能していない部分を、子どもによって補填されている状態であると考えられる。

以上より、第5因子で極端な値を示す事例は、養育者として子どもと密着しているというよりも、養育者は子どもを巻き込み、それによって支えられている状態にあると考えられる。

(7) 2つの下位尺度に亘って平均より2SD高い、あるいは低い得点の事例

2つの下位尺度に亘って極端な得点を示す事例は、(1) から (5) までで考察してきたことの組み合わせで考えられる。例えば、①「子どもの困難」と②「育児困難」で得点の高かった事例13では、子どもは知能検査を受け、投薬もあったが診断はついていない。しかし、養育者は子どもの発達の遅れがひどくなっている気がしており、(1) で考察した内容に沿っていると考えられる。学校の対応に対しても不満を抱き、父親もあまり子どもと関わりがないなど(2) で考察したこととも矛盾しないように思われる。他に②「育児困難」で高得点、③「親子関係困難」で高得点であった事例18は、父親に重い病気が見つかり、母親自身、「支えだった」両親を亡くし、養育者を抱える器が脆弱になっている様子が窺え、②「育児困難」の考察と合致すると考えられる。父親が子どもに話を聞くと、子どもは現在通っている学校とは異なる学校に行きたいと思っていることを告げ、母親が反対すると、子どもは母親に口を聞かなくなっていた。父親は子どもの話を聞く役割を担い、母親がそれを担うことが出来なくなっている状態になったと考えられる。

以上より、2つの下位尺度に亘って高い、あるいは低い得点を示す事例を検討したところ、それぞれの下位尺度について考察した内容の組み合わせで考察することが可能であると考えられる。

(8) 3つ以上の下位尺度に亘って平均より2SD高い、

あるいは低い得点の事例

事例10、事例17、事例22、事例23が該当し、虐待や家庭内暴力の事例が見られ、養育者の原家族や現在の家族など養育者を取り巻く関係の中で、何らかの対決や暴力性がある様子が窺えた。養育者が余裕のない精神状態にあり、無理をしながらもその状況に居続けていると推測される。これらの事例は、極端な値になった下位尺度それぞれの特徴を有していたが、それらの要素が複雑に絡み合っ、虐待や家庭内暴力など極端な人間関係にあると考えられる。

また、回答の仕方を見ると、②「育児困難」③「親子関係困難」の付け方が似ている。このプロフィールより、自分が親であるという意識が強く、それに加えて育児に「自信が持てない」ために苛立ってしまうものと考えられる。親の理想像が養育者にはあるので、子どもの事をネガティブに一見語るが、自分が何とかなくてはという思いも強いように考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究を通して、子育て質問票は、①「子どもの困難」、②「育児困難」、③「親子関係困難」、④「生々しさへの抵抗」、⑤「相互性」の5つの因子を背景に考えられることが明らかになった。この5つの因子をもとに、親子の状況を見立てることができると考えられた。この5つの因子が持つ意味合いを明らかにするために、それぞれを下位尺度とし、下位尺度ごとに平均から2SD高いあるいは低い得点を取る事例を検討した結果、それぞれの傾向についての示唆を得た。

①「子どもの困難」の高得点事例においては、実際の子どもの発達の特徴的行動が多少ともあり、加えて養育者も子どもを発達の遅れがあるのかどうかという眼差しで見やすくなっている状態にある可能性が示唆された。

②「育児困難」高得点事例においては、養育者が子どもを情緒的に抱えることが困難であったり、子育ての相談を出来る人がいない、多忙であるなどといった子育て環境の器が脆弱になっている可能性が示唆された。

③「親子関係困難」の高得点事例においては、それぞれに自分の役割を担おうとするが、連携がうまくいかず、結果として母子関係が閉鎖的になっている可能性が示唆された。

④「生々しさへの抵抗」の高得点事例においては、養育者が子育てを引き受けきれず、子育てから距離をとり、自分の感覚よりも「子育て」という概念の下、子育てに臨んでいる可能性が考えられた。

⑤「相互性」の高得点事例においては、養育者自身の不安が意識されておらず、子どもに養育者の一部を担わせ、補てんさせている可能性が示唆された。

2つの下位尺度に亘って±2SD以上平均より離れた得点となる事例は、5つの下位尺度それぞれに考察された内容の組み合わせで子育て質問票の回答の解釈をすることがある程度は可能であると考えられる。

3つ以上の下位尺度に亘って平均より2SD高いあるいは、低い得点を有する事例においては、その該当する下位尺度の特徴を有しているが、それらの要素が複雑に絡み合っている為、結果として家庭内暴力や虐待の傾向が見られ、養育者が極端な人間関係に置かれている可能性が考えられた。

子育て質問票の回答を因子分析して抽出した5つの因子を基にした下位尺度は、子育て質問票の解釈をするうえで、ある程度有用であるといえる。これは、子育て支援のアセスメントにおける指標ともなりうると考えられる。下位尺度得点の特徴は、来談時の養育者や子ども、両者の関係、子育て環境を多角的に見立てる際に有意義であることが示唆される。

一方で、今回は初回面接について検討を行った為、今後はその後の経過も踏まえる必要があると考えられる。現在のところ少数の事例分析による、仮説提示の段階であり、今後事例をさらに積み重ねて仮説検証を行い、子育て質問票の回答を解釈する上での指標を作っていく必要があると考えられる。

引用文献

- 橋本朋広・松本緑・後藤貴一・岩佐陽子 (2013) 家族機能及び虐待リスクを捉える尺度項目作成の試み 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 6, 33-37
- 川原稔久・総田純次 (2013) 「子育て支援 質問票」研究の背景と全体像 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 6, 3-8
- 川原稔久・川部哲也・長谷川智枝・橋本朋広・高橋幸治 (2014a) 「子育て質問票」の得点分布の研究 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 7, 17-27
- 川原稔久・川部哲也・長谷川智枝・総田純次・橋本朋広・高橋幸治・後藤貴一・中島歩・ホフマン・ステイーブン (2014b) 子育て質問票を用いた子育て支援の実践研究 (3) —臨床群と対照群の回答データ分析— 日本心理臨床学会第33回秋季大会ポスター発表
- 川部哲也・長谷川智枝・西地まどか・平岡尚子・呉伽

耶・堂野和人 (2013) 発達障がいの特徴を捉える尺度項目作成の試み 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 6, 3-8

小池徳子ら (2015) 子育て質問票を用いた子育て支援の実践研究 (4) —5つの下位尺度の抽出とその検討— 日本心理臨床学会第34回秋季大会ポスター発表

総田純次・平岡尚子・西地まどか・作田大輔・澤樹亜実・後藤貴一・川原稔久 (2014) 心理臨床センター臨床事例における子育て質問票プロフィールの研究 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 7, 29-36

高橋幸治・作田大輔・澤樹亜実・河邑淑子・石田暢子・中島歩 (2013) 親子の心と体の関係を探る尺度項目作成の試み 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 6, 9-19